



志が生まれるまで

# Mrs.

いつも、  
心がワクワクする方へ。

## 町を駆けまわる、好奇心

京都東山、古刹永観堂の白壁が続く閑静な通りを、おもちゃの刀を持って走り抜けていく男の子たち。その先頭に立って、ひときわ威勢のいい女の子が駆けていく。見れば両手に刀が握られている。この二刀流女剣士には、男子も敵わない。まさに「やんちゃ」を絵に描いたような女の子、それが後にJACグループの代表取締役会長兼社長となる田崎ひろみの幼少期の姿だった。

ひろみは、1950年12月23日に京都府の永観堂町で生まれる。彼女が小学生だった頃は、白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機が「三種の神器」と呼ばれた時代。子どもたちもブラウン管に映し出される時代劇に夢中になり、遊びはもっぱらチャンバラだった。このほか森の中に陣地を作ってターザンごっこをすることもあった。この

時代、女の子の遊びといえば、お人形を使ったままごとなどが定番だったが、ひろみはいつも近所の男の子たちを従えて、飛び回って遊んでいた。

ひろみの子ども時代を象徴する、もう一つのエピソードは習い事だろう。ものごころついた頃から彼女は多くの習い事に勤しんだ。絵、書道、日本舞踊、そろばん、英語、和裁、茶道、華道…。ジャンルを問わず、関心の赴くままに取り組む。もともと器用なタイプで、一つのことを習熟するのにそれほど時間はかからない。そして大人から褒めてもらえるくらいに上手になると、すぐに次の習い事を始める。そしてまた次へと広げていく。ひろみを突き動かしていたのは、次々に新しいことに触れていたいという好奇心だった。

面白いことにひろみは、「これをやりたい」と思ったら、親に相談することもなく勝手に塾に通ってしまう。とりあえず習い始め、あ



高校時代のひろみ(上から2番目)

とで月謝袋とともに母親に事後報告。それが彼女にとってのあたりまえだった。どういうわけか幼い頃から自分で考え、判断して行動する子だったようだ。家庭環境がそうさせたのか。父親は早くから家を離れており、母親は仕事で忙しく、家を空けることが多かった。一人っ子のひろみは、いつもおばあちゃんと過ごしており、親に甘えることができなかったため、自然に自分自身でどうするべきかを考えて決断し、行動するようになったのだろう。

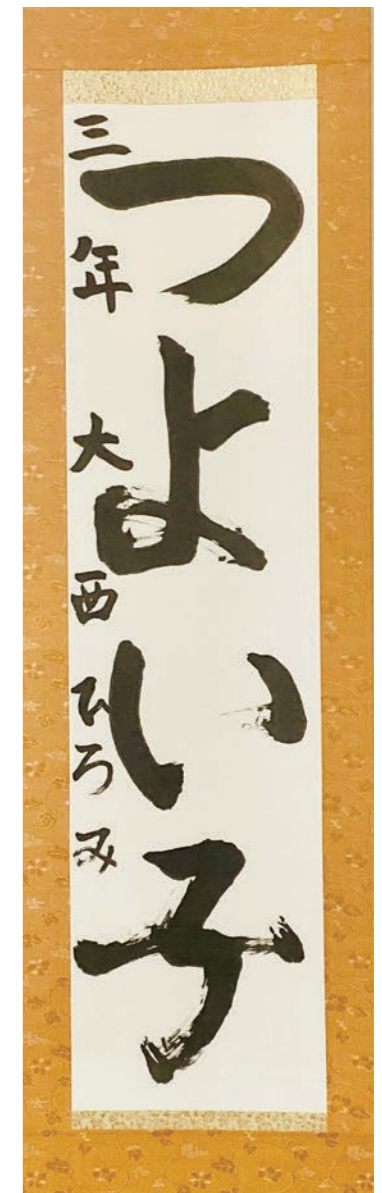
## 創り上げる喜びをもっと

何ごとも自発的に追求していくひろみの資質は、中学生、高校生と学年が上がるにつれ、より色濃く発揮されていく。公立の中学に進学すると、詩や小説といった創作活動に目覚めた。本を読むのは子どもの頃から好きだったが、自分でストーリーを考えることは難しく、取り組んでみるとたくさんの気づきがあった。彼女は、生きるとは何か、自分とは何かといったテーマについて考えを深めていった。同年代のクラスメイトから見ると、少し大人っぽく、やや理屈っぽい生徒だったかもしれない。

高校はミッションスクールの平安女学院に進学。創造性に加え、リーダーシップを発揮し、学校行事や部活で活躍する。例えば、学園祭にクラスで喫茶店を出店したときも、中心にひろみがいた。美味しいケーキとお茶を調達するため、つてのあるケーキ屋に自ら交渉して仕入れを行い、お客さんを楽しませるために当時流行っていたフォークソングをみんなで練習して披露した。どうすれば喜んでもらえるか、どうすれば上手いかわりにってとどんでんアイデアを出し、その熱意がクラスメイトを動かす。学園祭では学校はじまって以来の売上達成という逸話まで残っている。また、卒業文集制作の担当を任せられると編集・デザイン・印刷発注まで、すべてを中心になってこなした。先生へのインタビューを企画したり、「勉強

が一番できる人」「クラスで一番おもしろい人」といった切り口で投票を行い、クラス全員を主役とする工夫も取り入れた。誌面を作り込むだけでなく、印刷会社に通い詰めて製本までの作業を手伝ったというから、こだわりの強さは筋金入りだ。このほか、部活動はESSに所属。特別英語に秀でていたわけではなかったが、京都のミッションスクール5校で構成された Kyoto ESSA 同盟の会長として、グループを引っ張っている。

こうしてひろみは、自発的に、活発に動き続け、これまでになかったものを創ることの楽しさ、それによって評価される喜びを知り、周りの大人たちから一目置かれる存在となっていく。しかしキラキラ充実した日々を過ごす一方で、ひろみは成長の階段を上りながら、自分は何のために生きるのか、どんな大人になっていくべきか、という人生の大きな方向性を考えはじめる。



小学生の頃の習字。お題は「よい子」だったが「つよい子」とアレンジしたところにもひろみの性格が表れている





モデルとして海外を訪れることもあった



## 生きていく指針を、探して

ひろみが学生生活を送っていた10代の後半頃から、周囲では学生運動が盛んになる。若者たちは各地で集い、社会体制の矛盾について声を上げて糾弾しており、熱にうかされたような時代だった。ひろみ自身は集会に参加することはなかったが、誰もが熱く議論を繰り広げていたため、彼女も自然にこれからはどのような社会が望ましいのかというテーマに関心を持つようになる。そんな折、米国でヒッピー文化が流行ると、日本の学生たちはヒッピーの反戦思想や自由なライフスタイルに強い共感を抱いていった。ひろみはそのような大きな時代の流れの中で、自分たちの固定観念を覆す考えは、いつも海外からもたらされるという思いを強くしたのだろう。海外には、日本にない新しい考えがある。そこに行けば自分の探している何かが見つかるのではないか。そんな期待を抱くようになった。

思いがけず海外渡航のチャンスが訪れたのは23歳のとき。西陣織の海外広報キャラバンへの同行を求められ、知り合いとともにフランスとイタリアを訪問。現地でランウェイを歩くモデルも務めた。はじめて踏んだ異国の地は、何もかもが新鮮だった。帰国後、海外で勉強したいという漠然とした憧れは具体的な目標となっていった。

留学の候補地を検討し、ひろみが最終的に選んだのは、イギリスだった。長きにわたって世界の発展をリードしてきた品格ある先進国で、日本では得られない多くのものを獲得したいと考えたのだ。部活動のESSなどを通じて学んできた英語が生かせるという読みもあった。そこで24歳のとき、ついにイギリスへの語学留

学を実行する。現地へ到着してしばらくは、歴史の重みと芸術性を感じる街並みや、日本より進んだ暮らしぶりがひろみの心を捉えたが、徐々に英会話が上達し、現地の友だちとざっくばらんに語り合うようになると、やがてイギリス人の考え方そのものに強く惹かれるようになっていく。

あるときひろみは、路上生活者を目にしてつぶやいた。「なぜあの人は、自分で働くことをせず、人からお金をもらって暮らすのだろう。そんなのはフェアじゃない」。彼女にしてみれば、ごくあたりまえの意見だったが、イギリス人の友だちはその考えを否定した。「ひろみ、世の中には自分でやりたいことがあっても、できない人がいる。精神的な病気を持つ人もいる。そういう人たちに想いを向けなければならない」。イギリス人にとって、救いを求める人の重荷を、救える力のあるものが背負うことは、ごくあたりまえのこと。彼らにとってはそれこそがフェアな社会のあり方なのだ。ひろみはそんなイギリス人とのやり取りで日本、そして自分の考えがいかに遅れているかを知ってショックを受け、この国に尊敬の念を抱くようになった。

イギリスはペットについての考え方も日本とは全く違っていた。日本でも動物は愛おしいパートナーとして飼われているが、鎖でつながれた番犬、飼い主の都合で散歩にいけないペットなど、日本人が見てきた飼育の常識は、イギリス人たちにとって虐待も同然だった。イギリスには本当の家族としてのペットと人との関係があったのだ。そうした成熟した国ならではの考え一つひとつがひろみの胸を打った。よく知らない異国だったイギリスは、いつしか彼女にとって特別な国となっていた。

## 道なき道を進む高揚感

イギリスという国に愛着を感じ、この国で生活を続けていきたいと考えたひろみは、現地で働くことを選択する。そして知人の紹介で始めたのが、現地に進出していた住友信託銀行でのアルバイトだった。最初のうちは午前勉強、午後アルバイト。その後、日本人の女性社員が退職したこともあり、正社員として働くことになる。3年間、総務と会計の仕事に従事した。のめり込むと工夫して徹底的に仕上げようとする生来の性格もあって、ひろみの仕事ぶりに対する周囲の評価は高かった。細々とした業務まですべて人任せにせず自分で行き、とにかくがむしゃらに働いた。

しかしその一方で、与えられた業務はルーチンワークに近く、ひろみは次第に物足りなさを感じずにはいられなくなる。仕事を頑張り評価されることはうれしいが、自分自身の心がどこかで冷めており本気で向き合えなくなってきた。そんな気持ちを抑えてハードワークをこなすため、精神的にも肉体的にもすっかり参ってしまった。果たしてこの職場で働き続けていいのだろうか。

そんなときである。「人材紹介の仕事に携わらないか」と、人づてに誘いを受けた。人材紹介とはどんな仕事なのだろう。まだ人材紹介業という言葉すらなかった時代。仕事の内容はまるでわからない。しかし、それでもひろみは、この仕事に不思議な魅力を感じた。これまで誰も手掛けたことがない仕事を、自分が先頭に立つて進めていく。そこに新しい道を創り出す。その状況を考えてだけ

で気持ちが高ぶった。そしてひろみは転職を決意する。

新しい会社に初めて入社した日のことを、ひろみは鮮明に覚えている。事務所はスーパーマーケットの2階。用意されていたのは、ガタガタする机と椅子が1セットと電話だけ。とてもまともなビジネスを行う環境ではない。それでも心は高揚していた。前例のない事業、どうすればいいか誰にもわからない。なんて面白そうな仕事なんだろう、と。



ライオンズクラブに秘書として勤務

### ■ 田崎ひろみ PROFILE

京都出身。平安女学院卒業後、京都桃山ライオンズクラブの秘書を経て渡英し、1977年に住友信託銀行のロンドン支店に入行。1981年、Tazakiグループに人材紹介会社設立マネージャーとして入社し、単独で新規事業を切り開く。その新規事業を成功に導くと同時に、抜きん出た経営力が評価され、1991年にTazakiグループ社長兼CEOに就任。以後、Tazakiグループの社長兼CEOとして、また現在はJAC Recruitmentの代表取締役会長兼社長 (Co-Founder, Executive Director, Chairman & CEO) として、JACグループを統括、牽引している。

2014年、イギリスを拠点とする人材紹介業界の専門誌「Recruitment International」主催の表彰式典「The Recruitment International

Asia Award 2014”にて、人材業界の発展に最も寄与した人物の功績を称える“The Hall of Fame (名誉殿堂賞)”を受賞。長年にわたり人材業界におけるパイオニア的存在として、日本国内で自社と業界の成長に貢献しただけでなく、イギリスやアジア各国など、グローバルにビジネスを成長させた功績が高く評価された。また、米国の人材紹介メディア「Staffing Industry」が発表した「人材業界の権威のある女性」に、2015年から4年連続で選出される等、グローバルでも高い評価を得ている。

2022年3月に長年にわたる構想のもと「JAC環境動物保護財団」を設立し、動物保護とそれに伴う自然環境保護を行う団体への助成を通じて、SDGsや社会貢献活動にも注力する。